

2021 年度日本天文学会天文教育普及賞

【授賞者】 上越天文教育研究会と上越清里星のふるさと館

【活動名】 新潟県上越地方における地域の学校教育と緊密に連携した天文教育普及活動

上越天文教育研究会（以下、上天研）は、1975 年に上越地方の学校教員が中心となり、教育現場における天文教育の研究と推進等を目的として発足し、その後 46 年間にわたり、現在でも地域での天文教育普及活動を活発に継続している団体である。その活動の成果もあって、上越市がふるさと創生 1 億円基金活用の検討を開始した直後には天文施設という方向性が決まり、上天研のメンバーが準備委員会に入って検討を重ね、1993 年に清里星のふるさと館（以下、星のふるさと館）が上越市立の公開天文台として開館した。新潟県内では最大となる口径 65 cm カセグレン式反射望遠鏡およびドーム径 8.5 m、座席数 52 席の 4K デジタルプラネタリウムを運用し、冬季を除き毎週金曜土曜の夜に観望会を、また学習投影を含めたプラネタリウム投影を毎日実施している。ただ、職員は常勤 2 名、非常勤 5 名しかおらず、これらの事業には現在も上天研のメンバーの参加協力が必須である。

上天研と星のふるさと館の最大の特長は、創立の経緯からもわかるように両者の連携による地域の学校教育と強く結びついた教育活動である。

上天研は、自然の家などでの観測会の援助やジュニア天文教室、実天観測会、天体写真展などの多彩な活動の 1 つに、天文に関わる教材開発研究会や小・中学校における天文分野の公開授業と授業研究会があることが特筆すべき点であり、いずれも会員だけでなく広く上越地方の教員に公開され、地域の教員の研鑽の場となっている。

一方、星のふるさと館では、公開天文台としての通常の天体観望会等を行うとともに、訪れる学校ごとにその学校の教員と協力してオリジナルな授業を実施している。口径 65 cm 望遠鏡と 4K デジタルプラネタリウムの両者を活用し、近隣の上越教育大学と実習や実験等での連携を通して、初等中等教員養成や現職教員の学び直しに大きく貢献している。豪雪地帯のため冬期は閉館するが、上越市内の小中学校の 3 分の 1 以上に団体利用されている。

最近では、2020 年に落下 100 周年を迎えた楢池隕石（地元で落下した隕石で、その実物展示も行っている）の歴史や科学的意義などをまとめたパンフレットを、上越天文教育研究会と星のふるさと館スタッフが連携して作成し、上越市内の全小・中学校へ配布した。

このように、立場が異なる学校教員、星のふるさと館の職員がうまく連携し、学校教育を柱に地域に根差したユニークな活動を展開し、教材開発などの成果を出し続けている顕著な功績は他の公開施設にはあまり見受けられない希有な例として受賞にふさわしく、ここに 2021 年度天文教育普及賞を授与する。